5　他人ごとからわがことへ

フィールドに育てられる

安溪遊地

はじめに

実践的平和を生きることを，小田博志は，「平和する」と呼び，そのためのあらゆる手段を「平和資源」と名付けた（小田［1994］13-15頁）。これは，山口市の山村に居を定めて「半農半教員」の生活を送っている私が，妻の安溪貴子とともに，どのような「平和資源」を用いて，足下から「平和し」ようとしているかの実践報告である。多様であるという権利を認めず，圧倒的な暴力で迫ってくる不寛容に，寛容はついに敗北するしかないのか，という古い問い（渡辺［1993］194-211頁）を胸に，非暴力行動によって構造的な暴力を武装解除し，無力化していくための具体的な手法（シャープ［2012］巻末「非暴力行動198の方法」参照）を工夫していくという試みである。

人と自然のフィールドワークの中で地域の方々にきびしく叱られながら育てられるという経験の中から，私と妻は協働して，学界に向けて論文や著作を発表する以外にも，環境や平和や人権をめぐってさまざまな活動をしてきた。1974年からの西表島を皮切りに日本の南の島々，熱帯アフリカ，西ヨーロッパなどのさまざまなフィールドで学んだことや実践経験を，理路整然とまとめた論文形式ではなく，感性にも訴えつつ，可能な場合にはともに戸外に出るようなゼミや公開講座での自由な語りに近い形で紹介し

てみたい。主な興味関心は，グローバル化が進む中で，生物と文化の多様性が急速に失われていくという現実に対して，フィールドワーカーは何をなすべきか，また何が可能かの模索にある。論文や報告を書くことも平和への道筋を具体的に歩むことだから，その手法の一つとして，アカデミックなグループ内で読まれることだけを前提とした論文形式にこだわらずに書いてみた。さまざまな出会いの中で，厳しく鍛えてくださった地域のみなさまに心から感謝している。

具体例としては私と妻が個人的に体験してきた「紛争と和解」がテーマとなる。「和解」への見通しとしては，サティッシュ・クマール（Satish Kumar）師の説く，未来につながる暮らしのための３Ｓ，つまり「Soil（土）」と「Soul（魂）」と「Society（社会）」（クマール［2010］）との和解が指し示す生き方への共感を背景に，地球大の平和や環境という問題が「ひとごと・よそごと」から「わがこと」になりうるという道筋を示せれば，と考えている（湖中［1988］）。話題の展開は以下の順とする。

1．「自然」との和解。ここでは，「土」に代表されるいわゆる自然界との関係をどう築くのかを考える。体と土が結局は同じものであるという「身土不二」の世界の探求である。

2．「地域」との和解。根無し草の「旅の人」であることをやめ，日本の田舎に腰をすえて自家用の米と熱源の薪を自給する暮らしの20年の中で見えてきたこと。

3．「世界」との和解。文化の多様性を重んじる文化人類学の視点と，生物の多様性を重視する生態学の視点を融合させ「みんな違ってみんな変」という未来を切り開く取り組み。

１から３の節では，それぞれ次の３段階にそって筆を進める。まずは，

1．頭でわかる「理解」。フィールドワークで言えば「見る・聞く」の段階。フィールドで出会った「在野の達人たち」のことばのエッセンスを紹介する。続いて，

2．ハートでつかむ「納得」。言葉がしだいに実感を伴うものになっ

てくる模索の過程。フィールドで対話し，やってみる参与観察の段階。

3．体がひとりでに動くようになる「体得」。自分のこととして繰り返すうちに，しだいに身に付いてくるものがある。「ひとごと」が「わがこと」になるという大転換が起こる。

話の展開上，時間と空間が錯綜するので，簡単な年表（表1）でわが家の歩みを整理しておく（詳しくはウェブページ Ankei's Active Home, http://ankei.jp 参照）。

表1　年表：安渓遊地・安渓貴子のフィールドとの関わりの歩み

1．学びから理解へ	
1972-73	川喜田二郎氏の移動大学運動に参画
1974-77	伊谷純一郎氏・田端英雄氏の指導で西表島研究
1978-80	コンゴ民主共和国の村で養子になる
1981	大学教員になる。京都から沖縄島に移住
1982	山口市に移住
1983	コンゴ川上流部の物々交換市場の広域研究
1984-86	日本生命財団助成で西表島の人と自然の研究
2．納得から行動へ	
1986	チェルノブイリ原発事故。マリ共和国で漁民研究
1987-88	新渡戸フェローとして家族でパリに滞在
1989	ヤマネコ印西表安心米産直運動に関わり親戚扱いとなる
1990	コンゴで村おこしに乗り出すも挫折（安渓［2010］）
1990	ポストハーベスト農薬汚染を知り小さな畑を作る
1990-	東京・名古屋・広島・鹿児島など大都市への移住の誘いを断る
1993	津野幸人氏の指導で大山山麓で再生紙マルチ稲作
1993-2010	聞き書きを剽窃されたことから立松和平対策事務所所員となる
3．体得をめざす	
1994	山口市の山村に移住。“第三種兼業農家”となる
1996	山口県産材の産直で130年もつ家を建てる（安渓［2004］）
1999-04	屋久島フィールドワーク講座講師
1998	日本学術振興会ナイロビ駐在所の所員としてケニアへ
1999	安渓貴子が中国電力上関原発の環境影響評価技術審査会委員
1999-00	トヨタ財団助成でケニアと屋久島を結ぶ森林保全
2000	生態学会上関原発要望書を可決。ガボン共和国で研究

2005	スペイン北部ナバラ州に滞在。再生可能エネルギー研究
2005-08	一家で地元のゴミ処分場誘致に反対する運動に参加
2006-11	地球研・列島プロジェクトで奄美沖縄班を組織
2009-	ソウル大学校の全京秀氏と出会い兄弟となる
4.「着土」の実践	
2010-	幕末維新長州僧の研究（安渓・安渓［2012］）
2010	家の側の携帯電話中継塔計画に反対し集落幹部と対立
2011	福島第一原発事故。避難民受け入れのため水田と家を購入
2012	家族で完全無農薬無除草剤栽培の「阿東つばめ米」生産農家となる

松田素二（松田［2013］20-21頁）は，かつて経験したことのないような変化と流動性の中にある現代世界では，人類学者は社会の現実から目をそらすことなく，「関与」し「介入」せざるをえないと指摘する。その時にローカルな価値とグローバルな価値をいかに折り合わせるかという難題を，彼は生活論による折衷で突破しようと考えている。私は，人間活動と自然との共存という課題を，家・近所・自治体・国・政府間パネル・国連のような，重層する環境ガバナンス間の連携によって答えていくという道筋を考えている（安渓遊地［2011］）。いずれも，研究者個人の自覚と行動，研究者のグループの役割が問われるという，研究倫理の問題と不可分に結び付いた問いかけである。

自分なりの経験をふまえて，フィールドで教えを受ける研究者としてのフィールドとのつきあいの作法や，グローバル化の中で破壊の危機に直面している自然や伝統文化や地域社会について，研究者がどのような態度をとるべきかについて，あらかじめ若干の意見を述べておきたい。これまでの書き方にならえば，「する側とされる側の和解」ということになるだろう。そのような意識の中で，「もうひとつの未来」のための協働の可能性をどのように求めていくのかについて考えながら読んでいただければ幸いである。

1　「自然」との和解

1　自然と共存する人びとの生き方を知る

1970年代の半ば，京都大学の北側の小さなアパートで暮らし始めた私と妻は，環境保護や暮らしの安全への取り組みに特に熱心だったわけではない。家を「きれいに」保とうと定期的に殺虫剤のくん蒸をしていたほどである。

良い意味で大きなショックを受けたのは，コンゴ民主共和国の100人ほどの村での暮らしだった。腐らないゴミ（プラスチック）や人工的な汚染物質がほとんどない日常がそこにはあった。焼畑で食べ物を得て，木と草と土で家を作り，川沿いの漁師と物々交換をして魚を手に入れていた。外から買うものは，鉄製品と塩と衣類・石けんぐらいだった。ある日，たき火に転がり込んだ使用済みの水銀電池が熱で破裂したとき，環境を汚染してしまった罪悪感を感じたものだ。

私は，漁民の魚の知識を調べ，グローバルな破壊力を持つ「お金」の使用をローカルな立場で制限する物々交換の市場の制度を村人が作り上げてきたことに感銘を受けた（安渓遊地［1984］）。安渓貴子は，村に2,000種類を超える料理のレシピーがあることを見つけ（Ankei T.,［1990］），自給的な生活を支える森の植物との関わりの記録をまとめた（安渓貴子［2009］）。それまでの私は，人間は自分の住む環境を破壊しつくしてそれによって滅びるように運命づけられている呪われた生物であるかのようにどこかで感じていた。だから，環境問題に真剣に向き合うという意識を持つことがなかったのだろう。しかし，自然の資源を人間への恵みとして受け取りながら，環境を大きく破壊することなく持続的に暮らしていく確かな知恵がアフリカの森の民にはあることに強い印象をもったのである。

それから子どもが生まれ，パリで暮らすようになった日々，私はラスパーユ大通りの社会科学高等研究院の中にあるアフリカ学研究所で，貴子は

植物園の中の自然史博物館の民族生物学研究室で受け入れていただくことができた。世界都市の交流の豊かさはあったのだが，大都市の環境は悪く，２月になると煤煙のせいか喘息のような症状に悩まされた。

2　チェルノブイリからの風に吹かれて

フランスで果物の不思議な食べ方に出会った。知り合いの家に招待されて食後のブドウが出たとき，数粒ずつ机の上のボウルに入れた水に浸しては皮と種子ごと食べるのだ。真似をしながら理由を聞いた。「皮についてる放射能を落とすためでしょ，長く水につけると味がおちるのよ」という返事に，笑いをこらえながら「除染」を続けた。

当時４歳の息子を含むわが家のフランス滞在は，チェルノブイリ原発の事故の影響がヨーロッパ全土で深刻化する時期と重なっていた。庶民には防御する知識もなく，原子力大国のフランス政府の発表は，「チェルノブイリの影響は無視できる」の一点張りだった。その一方で，プルトニウムを燃やす高速増殖炉のスーパーフェニックスは，大規模な金属ナトリウム漏れ事故を繰り返して死滅に近づいていた。私は新聞を毎日買って自己防衛の方法を模索し始めた。

3　山口に根を下ろす

フランスから日本に帰ってまもなく『ポストハーベスト農薬汚染』（学陽書房）という１本のビデオを見て，大きなショックを受けた。輸入食品にこれでもかというくらいさまざまな収穫後の農薬処理がされていることをあばいたドキュメンタリーだった。これを見た後，妻はいつものスーパーに行っても，何も買えずに帰ってくる日々が続いた。

これがきっかけで借家の前に小さな畑を借り，ジャガイモを育て始めたのが，わが家の暮らしの大きな転換点になった。さらに1993年には鳥取大学農学部長だった津野幸人さんのお世話で，大山のふもとの村に１年間住んで，化学物質にたよらない再生紙マルチ稲作を経験させてもらう機会を

得た。1993年の「サムサノナツ」で日本中が米不足によるタイ米パニックになっているのを尻目に，わが家は１年分の飯米を枕元に積みあげていた。そして，政府が決意して人口の適正な配分が実現すれば，日本列島で１億5,000万人が食料自給でき，食料争奪戦争も避けられるという，説得力のある試算を知った（津野［1991］９頁）。

鳥取から山口に戻ると，市街地から20キロほど離れた山村に引っ越して自給的な農業をする暮らしを目指すことにした。借りられる空き家がなかったので家を建てることになった。「施主ができることは自分でやれ」というのが，宮大工の棟梁の方針だった。県産材の産直を試み，在来工法で家を建てる14ヵ月の間に，地域の生活者とのさまざまなネットワークができていった（安渓［2004］）。しかし，村に住めば村の人間模様があり，平穏な自然生活が送れるというわけではなかったのだ。

一方，土に触れる暮らしをするようになって，それまでの聞き取りでは話してもらえなかった畑の神や水の神への祈りの仕方を屋久島で教えられたり，研究の面でもそれまでは見落としていたさまざまなことに気付いたりするようになっていった。しかし，時を同じくして，私と妻の聞き書きを某作家が剽窃して深刻な人権侵害を引き起こす結果になったことから，聞き書きに伴う社会的責任の重さをも自覚させられるようになった（安渓［2002］）。

2　「地域」との和解

1　沖縄人のやさしさと粘り強さに学ぶ

支配者が次々に変わる「世代わり」の渦の中で，沖縄の庶民が身に付けた知恵が，「物喰ゆすどぅ我が主」という格言に表れている。長いものには巻かれろと訳してもいいだろう。ところが，出すぎる杭は打たれない，という個人運動や島ぐるみ闘争を継続させてきたのもまた沖縄の人びとであった。

わが家の基本設計をしてくれた真喜志好一（まきしよしかず）さんは，復帰に伴い故郷に帰ってからは，時間とエネルギーの半分は建築設計の仕事に，半分は市民運動に使うことに決めたという。沖縄キリスト教短期大学のキャンパスの設計で，彼が1991年度の日本建築学会作品賞に輝いたとき市民運動の仲間たちは「真喜志君まだ建築もやってたの？」と驚いたという。

沖縄の復帰が決まって，真喜志さんは大学の助手を辞して沖縄に戻った。国の出先の役所勤務である。計画中の沖縄国際海洋博覧会（1975-76年）に反対していた彼は，職場に反対運動のポスターを貼った。実は，机一つ隣の部局がこの海洋博推進担当だったのだ。せっかく貼ったポスターが，なぜか翌朝には消えている。大丈夫，在庫は何枚もあるのだ。いたちごっこの何日かが過ぎて最後の１枚となったとき，真喜志さんは，ポスターの裏にさらさらと何かを書いて貼った。翌日，ポスターが撤去されているのを見て，真喜志さんの仕事ぶりが変わった。お茶を飲み，新聞を読み，天井を眺めて考える。サボタージュである。３日もすると，処理すべき書類が机の上に山のように積み上がる。見かねた課長がやってきて顔の前で手を振りながらどうしたのかねと尋ねる。

「実は，予定表を書いた紙を貼っておいたら，それが行方不明になって仕事の段取りが判らなくて困ってるんです」というのが真喜志さんの返事だった。翌朝，沖縄海洋博反対のポスターはもとの場所に戻されていた。真喜志さんが仕事の遅れを猛然と取り返したことは言うまでもない。「こんなのが，ウチナーンチュのやさしさとしぶとさだよぉ」と教室で紹介したくなるエピソードである。

2014年８月に訪ねた辺野古のキャンプシュワブ側のテント村には「勝つ方法はあきらめないこと」という言葉が掲げてあった。足をのばして，映画『標的の村』（三上智恵監督）で描かれた東村高江のオスプレイ基地建設の現場を訪ねた。高江のテントにかかげてあった，暴力・暴言・無断での写真撮影は誰に対してもしないでください，という非暴力に向けたお願いが強く印象に残った。米軍という圧倒的な暴力に対して，1970年12月20日

写真１　阿波根昌鴻さんの建てた平和資料館・ヌチドゥタカラの家の入り口で（伊江島2009年８月２日）

のコザ暴動のような暴発はあったが，伊江島土地を守る会の阿波根昌鴻さんらのように，非暴力によって粘り強く抵抗してきた沖縄人の知恵がここにはある（写真１）。

2　ヤマネコ印西表安心米の冒険

1988年夏，パリの滞在も終わりに近づくころ，西表島から客を迎えた。いつも泊めてもらっている地域おこし運動家の石垣金星さんだ。「ここが世界の中心だ」が口癖の彼に，パリやブリュッセルを見ておいてもらうのも悪くないと思って飛行機代をプレゼントしたのだ。話を聞いてみると，フランスへの出発前に危惧していたことが島の現実になり，政府から水田への農薬散布が強制されるが抵抗する方法がないという。

西表島500年の無農薬米の歴史（安渓他［2007］）などを売りにできないか。フランスから帰って間もない1988年11月に「西表島の人と自然」現地シンポジウムを計画して日本生命財団の成果発表事業の支援を求めた。國分直一先生をはじめ第一線の学者や地域づくりのエキスパートが集まり，

地域の人も多く参加して盛り上げてくださった。その中で提案した，「ヤマネコ印西表安心米」産直の構想が，ひょんなことから翌年具体化し，私と妻は産直に関わることになる。

この産直運動の中で私と妻は大きな危機に出会い，それを乗り越える中で多くの仲間を得た。その結果，商売は学問より厳しいという当たり前のことがしみじみわかったのだった。期限までに論文が書けなくても謝れば済む。しかし，青ざめた農家や，殺気立った借金取り，なんとかだまし取ってやろうという詐欺師，この際ヤミ米で検挙してやろうという役人たち，そしてたまにいるクレーマーの消費者。役割や電話での声音を使い分けながら，それぞれの対応をひと夏の間続けた（宮本・安溪［2008］71-77頁）。

なぜ，西表安心米の運動に私と妻はこれほどのめり込んだのか。それは，それまでの14年間のつきあいを通して，第二の故郷と思うようになった西表島で始まる農薬の一斉散布への強制的な指導は，その生態系と人々の健康の未来を左右するできごとであるからだ。そもそものアイデアの段階から言い出した責任がある。こうしてわが家は抜き差しならないところに入り込んでしまったのだ。

精神的な起伏の激しい夏休みが終わって山口に戻るにあたって，なけなしの貯金を全部おろして送金した。倉庫の資材費の未払いだけでも600万円に達していた安心米にとって焼け石に水ではあったが，ひとごとではなくなりはじめたのだった。それからほぼ2年にわたって，このビジネスを軌道に乗せるための営業のボランティアが研究に優先するという状況が続いた。論文執筆も学会発表もストップ状態となった。

この運動の中で，わが家は西表島では親戚（ウトゥザマリ）扱いを受けたり，農薬農業推進側からは，「西表のガン」呼ばわりされるようにもなった。親戚扱いには，いいことも悪いこともある。たとえば，借金を返すとしても一番最後にされる。これは他人に対するようなめんどうな言い訳がいらないからだ。借金を返し終わるまでに10年の年月を要した運動だったが，それでも逃げずに農民とともに踏みとどまるという経験だった。

この活動については，いろいろな批判も受けた。伊谷純一郎先生からは「学問はアグレッシブに，けれどこの人はアグレッシブすぎるな」と言われた。それらの批判の中でもっともするどいのは，次のような島びとの声だった（宮本・安渓［2008］47-48頁）。

> でも，研究の結果が実用に結びつくと，怖いことになることがあるわねえ。あなたも，最近，どこかの島で「無農薬米の産直で地域おこし」とか言って旗ふってるらしいけど，島の人間が独力でできるように育てていかなくちゃだめでしょ。今みたいな，船をひっぱって岩ゴロゴロの山道を通すようなやり方が長続きすると思うのは，あなたの思い上がりじゃないかしら。無理に無理を重ねて家族を泣かすような学問が何になるの。
>
> よぉく考えてね。よそから持ってきた智恵や文化で，地域が本当に生き延びられるわけがないのだということを。

3 「日曜百姓のまねごと」から

自給的な稲作を1993年に鳥取で始めてからずっと「山口安心米」を育ててきた。それは，西表安心米の生産農家と「親戚扱い」になったことと関連している。ボランティアで営業・宣伝に力を入れていると，注文が生産量を上回ることが起こる。その時，親戚には西表安心米が回ってこないのだ。もともと自分が食べたいこともあって応援しているのだが，この不条理を解決するためにも食料自給の道を選んだのだった。

わが家の農的な暮らしの師匠である津野幸人さんや，槌田敦さん・槌田劭さん兄弟とともに，1997年に福井県奥越での農業のシンポジウムに出たことがある。そのあと，匿名の手紙が東京から届いた。文面は以下のようだった。

> たかが日曜百姓のまねごとを偉そうに吹聴して，原稿料や講演料をふんだくっている阿漕な大学教員が関西方面にいるとは聞いていたが，おまえもがその仲間とはあきれかえった。百姓をしたかったら，黙って仕

事をしたらよい。大学をやめたら信用してやろう。恥知らずはやめろ。

良心に問え！。

もともとかんしゃく持ちだった私は，このような手紙にも腹が立たなくなっていた。自ら選んだ農的な簡素生活の中からは，学問の追究だけの暮らしからはなかなか得られなかった，自然や地域に溶け込むという実感が少しずつつかめるようになってきていたからであった。

3 「世界」との和解

1 加害の記憶

日本人はアフリカを植民地にしなかったし，奴隷貿易にも手を染めなかった。だから，ヨーロッパ人やアメリカ人が感じるような複雑な感情をアフリカに対して抱くことがないのだ，という言い方がある。実際は，アパルトヘイト体制を最も積極的に支えたりしてきた日本人の手が汚れていないわけではない。そして，日本が植民地としたり戦争したりした東アジアや太平洋となると，事情はぐっと違ってくる。

島びとの言葉に耳を傾けてみよう。西表島崎山村出身者から聞いた「安東丸事件」の証言は，私の初めてのフィールドである鹿川（かのかわ）廃村が舞台だ（安渓・安渓［2000］49頁）。

> あの鹿川湾の洞窟にはね，こんなことがあるんですよ。こんどの戦争中に内離島の成屋（なりや）村跡の浜で難破した朝鮮の船がありました。アントン丸といったか。その乗組員たちは，西表島にいた兵隊たちからひどくこき使われて，食べるものもろくにもらえないので半死半生になっておりました。私らが弁当を食べていると「ごはんチョーチョー」といって来ました。兵隊に見つからんように弁当を分けてあげる島の人もいましたが，たいがいは，あげなかったですね。ところが，終戦になったから，こんどはあの人たちを誰もいない鹿川湾の洞窟の前の田んぼあとに放り出したんです。食べる物もないし，雨ざらしでしょ

う，みんな死んでしまったんですよ。小野大尉が兵隊を連れて行って死骸を埋めたということです。そんなことがあってから，あの洞窟に寝るのが怖くてねえ……。

屋久島ではこんなことを聞いた（安渓・安渓［2000］243-244頁）。

日本人と満州の人たちは兄弟のようなものだと日本では聞かされて，満州に行きました。しかし実際に行ってみると，自分と中国人や朝鮮人との間の差別はものすごいものでした。たとえば，中国人は鎖で両側をはさまれて，ふんどし一つで工場まで歩かされます。着替えるのも吹きっさらしの戸外です。そして言うことを聞かんとムチで叩くんです。会社までいく途中に，そういうひどい目にあわされている人を毎日のように見るんです。りんごを大箱にひとつ丸ごと中国人の店先からとって，お金をぜんぜん払わない日本人もいました。そういう人は，マーチューという馬車に乗っても，ただ乗りするんですね。当時僕が満州で見た日本人のうち，中国人や満人に対して正直にやさしくしていた人は，さあ，10人のうち４人いたかなあ……。ロシア兵が入ってきた時，日本人でもつねひごろ中国人にやさしくしていた人は中国人に隠してもらっています。その逆に，いつもひどい目にあわせてきた日本人の場合は，中国人たちがロシア兵に渡す前に自分たちで銃殺しましたね。いくら日本人が頭を下げても，僕なんかの時代を生きた中国の人たちは，日本人が中国でしたあの仕打ちを死ぬまで忘れんですよ。人種差別をなくしていって，将来は世界をひとつの家庭のようにしないといけません。

僕は，満州で日本人のものすごい仕打ちを見てきたんですから。

2　記憶を生きる

こういう話を耳にするたびに，韓国にも中国にもなかなか足を向けにくいと感じていた。それが大きく変わったのが，2008年11月，韓国珍島での出会いだった。学生実習と国際珍島学会に招いてくださったソウル大学校

の全京秀教授（人類学）に会って，100年の知己のように感じたのである。明くる年の２月には山口に来ていただいて講演を頼み，その後はともに沖縄八重山まで足を伸ばした。

私と妻は，お母さんが済州島の人である全教授とともに，チェサ（祖先供養と感謝祭）を与那国島と西表島で執り行った。1477年に与那国島に漂着し，島びとと平和な交流をしたことがことこまかに伝承されている済州島民のための祈りであった（安渓貴子・安渓遊地［2011］，安渓遊地・安渓貴子［2011］）。与那国島の宿の風呂で背中を流し合いながら，私は全教授にこんなことを言った。

> あなたに会ったとき，最近亡くなった兄にそっくりだったので，びっくりしました。実は，僕の母の母の母ヨネの兄は，萩出身の曽祢荒助という人で，初代の伊藤博文の次の（韓国）統監でした。亡くなったあとを嗣いだのが寺内正毅です。こんな僕でよかったらどうか，弟にしてください。

その時以来，京秀兄貴は，新しくできた弟夫婦を，雲南省，済州島，鬱陵島の学会などあちこちに連れ回してくださっている。こちらも，時には奥さんのヌミさんもいっしょに，山口で田植えをしたり，椎茸のコマを打ったり，京都や台北の学会に招いたり，ルーツを探して越の国の寺をめぐったりしながら（安渓・安渓［2012］），学問的にも家族としても行き来を絶やさない関係が続いている。

ビビンバは混ぜれば混ぜるほど味が良くなるという。コンゴの森の村で養子になった在日アフリカ人として（安渓［2010］），全京秀兄貴の「人間ビビンバ」づくりに加わりつつ，福島原発事故の避難民を受け入れてともに暮らせる地域をつくっていきたいと願っているところだ。

3　いま，ここでプラグを抜く

1990年の７年ぶりのコンゴ民主共和国の一人旅は私をうちのめしていた。アフリカの大都市の暮らしは酷いけれど，少なくとも田舎は元気だ，と自

分に言い聞かせ，教室では学生たちをも騙してきたのがもう通用しないと感じた。故郷の村々では殺人・廃村などの深刻な事件が次々に起こっていたのだ。1994年のルワンダ大虐殺からコンゴ民主共和国の内戦を経て第1次アフリカ大戦につながるような地域社会の崩壊の予兆がすでにあちこちで感じられたのである。

世界で最も資源の豊かなコンゴ民主共和国で，人びとが最低の暮らしを強いられるということや，資源があることが内戦に火を注ぐという矛盾。この「資源の呪い」をもたらしているのは，それを必要としている先進国の私の生活様式そのものだ。だとしたら，その問題解決の最先端は，日本の自分の住むところにあるはずだ。その呪いを自分の足もとで解かない限り，おめおめと再びアフリカの大地を踏めない，そう感じながら日本に戻ってきた。

山口の田舎暮らしは，サラリーマン生活のかたわら安心安全なお米の自給だけでなく，建築材料やその暖房のための化石燃料の大規模な輸入に頼ることなく自給的に暮らせないかという実験的な挑戦でもあった。もういちどアフリカを訪れていいかと思えるまでに7年の時間が必要だった。

2000年3月，日本生態学会は，学会の歴史で初めて原子力発電所計画に対して異議申し立てをした。原子力産業にもの申すことになったのである。安渓貴子が山口県の環境影響評価技術審査委員に就任していくつ目かの案件として，1999年に提出された上関原子力発電所建設計画があった。この審査の過程で，山口県に面した周防灘の上関原発予定地の自然が驚くほど豊かなものであり，それに見合った環境影響評価がされていないことが明らかになった。

いいかげんな環境アセスメントで埋立てしまっていい環境ではない。日本生態学会から要望書を出してはどうか，という助言を屋久島の研究者仲間からもらった。学会の自然保護専門委員会に安渓貴子がオブザーバーとして説明して前向きに受け入れられた。

自分のフィールドの自然や文化が破壊されようとしているとき，研究者

はそれを守るために立ち上がるのか，それとも研究のために急いで補助金を申請するのか。文科系の学会しか知らなかった私は，社会的責任に敏感な日本生態学会の動きに感銘を受けた。この時以来，私は妻とともに学会に入会し，やがて自然保護専門委員を引き受けて生態学会の自然保護案件に係わり続けている。とくに，上関原子力発電所については，日本ベントス学会，日本鳥学会，軟体動物多様性学会などとも歩調を合せて，2011年３月の福島第一原発の事故までに合計12件もの意見書・要望書を提出して取り組んできた（日本生態学会上関要望書アフターケア委員会 ［2010］）。

もちろん，学会として行う自然保護の活動は，住民の行う自然保護運動ではない。まして反対運動ではない。4,000人に上る学会員には，開発側の環境アセスメント会社の社員も多い。だから，上関原発の要望書で言えば，破壊する前にもっときちんとした調査をしてください，ということで合意が得られたのである。これなら，アセスメント会社も仕事が増えるので異議はない。そのようにして審議を重ねて世に出した後，その意見が社会的に認知されるようにお世話するのが，アフターケア委員会である。こうした活動は，推進でも反対でもない，あくまで中立の学術的な立場を崩さずに行うものなので，新聞やテレビなどでも取り上げてもらいやすい。アフターケア委員会は，自然保護団体と協賛して国際シンポジウムを開催するといった活動もしている。長いものに巻かれない志ある研究者や市民科学者たちが確かにいることを知る宝物のような出会いがそこにはあった。

2005年，私と妻がスペインにいるときに，留守宅から息子が電話してきた。わが家のある山村に山口市の燃えないゴミの最終処分場を誘致しようという動きがあるというのだ。市民の飲み水の源流に自分たちのゴミを捨てるのか。しかも豪雨で土石流が起きやすい花コウ岩の山。９月の帰国後から，26軒対５軒の絶対少数ながら，下流の人が中心となって地域のボスの動きに先んじて署名活動や反対の看板設置，新聞発行，ブログ開設などの手を打っていった。２年半の時間をかけて計画は最終的に市民の飲み水の下流に変更となり，ついでに漫然と続けられていた松枯れを起こすマツ

ノマダラカミキリを殺すと称して効果の薄い農薬の空中散布も完全に中止させることができた。

自分の住む集落で起こる問題に取り組むことは，リラックスできるはずの家と近所が闘いの現場になる分，精神的な負担が大きい。足もとが火の海になるということだ。自然保護のために時々霞ヶ関に申し入れに行くのとはストレスの度合いが桁違いだ。この経験を経た今，上関原発予定地から3.5キロの祝島住民の32年におよぶ反対運動や，幼い子供までがSLAPP裁判の対象にされた沖縄の東村高江の人たちの粘り強さに頭が下がる。

それでも，このゴミ処分場反対運動を通して，地域のボスの言うなりにハンコを押してしまう人びとと，自分で考えきちんと意見を言い，行動で示すことができる人びとの違いが浮き彫りになったことは大きな収穫であった。

次の闘いは業績10兆円の産業が相手だった。2010年10月に回覧版で，携帯圏外だったわが集落に携帯電波中継塔が建つことを知った。公民館の広場の裏山に建つのだが，その真下の家より，100メートルほど離れたわが家の浴びる電磁波が８倍程度高いらしいのである。日本の基準は国際的にも甘いが，人によって過敏症が出ることがあるなど，環境問題の授業で教えているところだから，慌てた。さっそく携帯電話会社の担当にメールをした。返事は「電磁波の安全性についてご自宅にご説明にうかがいたい」と言うのだが，納得のいく説明はもらえなそうもない。

今度は１軒だけの取り組みだから，便利になることを期待する集落全体を敵にまわすかもしれない。でも，もしも家族の１人でも電磁波過敏症だったら，県産材で建てたせっかくの家に住めなくなる。なぜうちは困るかということを書いて全戸に配布した。村の役員たちは，「ごくごく一部の反対があっても，国の基準を守っていれば何の問題もないのだから，計画通り進めてほしい」という決議を3,500人が住む地区全体の自治会決議として施工業者に提出した。そうとは知らずに，勤務先に説明に来てくださいというメールを事業者に送った。すると不思議なことに，どの位離れた

ら建てても良いか，という問いあわせがきた。結局700メートル以上離れたところ２ヵ所に建てることでこの問題は決着した。

当初の計画が変わって腹の虫が収まらないのは，村の役員たちである。その１人が，わが家の自給用に借りていた田んぼの地主だった。田んぼを返せと言われた。理由はないし跡を使う予定もないという。15年耕した無農薬の田んぼである。わが家が田舎に住むことを選びとった最大の理由がこうしてあっさりと奪われてしまった。そして代わりに借りたり購入したりできる田んぼもなかなか見つからなかった。

その時，自宅から40キロ以上離れた，津和野町にほど近い山口市阿東地区の源流部に空いた田んぼ60アールと小さな家があるという報せを友人が持ってきてくれた。福島第一原発事故のために，知人の家族が有機農業を断念したということなどにも背中を押されて，思い切ってその土地と家を買った。家族で田草を取り，放射性セシウムの量も測って安全を確認しながら無農薬米の販売も始めた。ブランドは「阿東つばめ米」とした。こうしてわが家は息子が農業者になるという道を選び，フクシマ以後の世界をわがこととして生きるための新たな一歩を踏み出すことになった（安渓・安渓［2014］；吉松［2015］）。

このように足もとから「自然」「地域」そして「世界」という，不断に闘いをいどんでくる不寛容に対して，武器をとって戦うのではなく，さまざまな「平和資源」で和解し寛容を守るというささやかな模索の経験を紹介してきたつもりである。

読者も，シャープ［2012］の提唱した「非暴力行動198の方法」に，自分なりの項目を付け加えて実践してみてはどうだろうか。上に述べてきたように，私は妻とともに，メディアが権力によって掌握されているという危機的な状況の中で，「199. 学会に異議申し立ての決議をするよう働きかける」「200.マスコミが取り上げやすい中立のメッセージを準備する」の２つを付け加えてみたのだった。

参考文献

Ankei, Takako［1990］, “Cookbook of the Songola: an anthropological study on the technology of food preparation among a Bantu-speaking people of the Zaïre forest,” *African Study Monographs,* Supplementary issue. 13, pp.1-174.

安渓貴子［2009］,『森の人との対話――熱帯アフリカ・ソンゴーラ人の暮らしの植物誌』（アジア・アフリカ言語文化叢書14）東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所，1-614頁。

安渓貴子・安渓遊地［2011］,「530年前の済州島からの漂流民の記憶」安渓貴子・盛口満編『うたいつぐ記憶――与那国・石垣島のくらし』ボーダーインク，61-84頁。

安渓遊地［1984］,「『原始貨幣』としての魚――中央アフリカ・ソンゴーラ族の物々交換市」伊谷純一郎・米山俊直編著『アフリカ文化の研究』アカデミア出版会，337-421頁。

安渓遊地［2002］,「聞き書きと人権侵害――立松和平対策事務所の10年」『山口県立大学国際文化学部紀要』8，69-78頁。

安渓遊地［2004］,『やまぐちは日本一――海・山・川のことづて』弦書房，1-120頁。

安渓遊地［2010］,「『父たち』の待つ村への旅――私のアフリカ経験から」『季刊東北学』24号，36-49頁。

安渓遊地［2011］,「足もとからの解決――失敗の歴史を環境ガバナンスで読み解く」湯本貴和編，松田浩之・矢原徹一責任編集『環境史とは何か』文一総合出版，243-261頁。

安渓遊地・安渓貴子［2000］,『島からのことづて――琉球弧聞き書きの旅』葦書房，1-270頁。

安渓遊地・安渓貴子［2011］,「1477年の済州島漂流民と与那国島民の交流の記憶」安渓遊地・当山昌直編『奄美沖縄環境史資料集成』南方新社，547-576頁。

安渓遊地・安渓貴子［2012］,「越の国巡礼――幕末維新長州僧の足跡をたどる旅」『季刊東北学』30号，166-193頁。

安渓遊地・安渓貴子［2014］,「それでも今希望を語る」『星が降るとき――3・11後の世界に生きる』Santa Cruz: New Pacific Press，142-144頁。

小田博志［2014］,「平和の人類学・序論」小田博志・関雄二編『平和の人類学』法律文化社，1-23頁。

クマール，S., 辻信一・本田茂監修［2010］,『サティシュ・クマールの今,

ここにある未来』（ナマケモノ DVD ブック）ゆっくり堂。
湖中真哉［1998］,「他人事としてのアフリカ，我が事としてのアフリカ」日本学術振興会『ナイロビ研究連絡センター・ニュース』１号，1-2頁。
シャープ・G［2012］『独裁体制から民主主義へ――権力に対抗するための教科書』筑摩書房。
津野幸人［1991］,『小農本論――誰が地球を守ったか』農山漁村文化協会，1-211頁。
日本生態学会上関要望書アフターケア委員会編［2010］,『奇跡の海――瀬戸内海・上関の生物多様性』南方新社。
松田素二［2013］,「現代世界における人類学的実践の困難と可能性」『文化人類学』78(1)1-25頁。
宮本常一・安渓遊地［2008］,『調査されるという迷惑――フィールドに出る前に読んでおく本』みずのわ出版。
吉松敬祐述，安渓遊地・今村主税編［2015］,『やまぐちの有機農業のために――いのちと循環の考え方と実践』山口県立大学ブックレット・新やまぐち学 No.1，東洋図書出版。
渡辺一夫著，大江健三郎・清水徹編［1993］,「寛容（トレランス）は自らを守るために不寛容（アントレランス）に対して不寛容（アントレランス）になるべきか」『渡辺一夫評論集――狂気について　他二十二編』岩波書店，194-211頁。
注：著者のブログ（http://ankei.jp）で検索するとダウンロード先にリンクするものもあります。

［山口県立大学国際文化学部＝人類学］